

1997年度

# 高等部研究のまとめ

Contents...

1. はじめに	1
2. 研究経過	2
3. 結果	3
4. 来年度へ向けての改善	15
5. まとめと今後の展望	19

# 1. はじめに

## 全体研究とのかかわり

本研究は、一言でいうと、指導内容を「既製の題材の目標からではなく、生徒ひとりひとりの課題から」組み立てようというものである。そして、それを達成する方法として次の3つの柱を考えている。

- 1) 生徒ひとりひとりの情報を担任のもとに一元化し、有効に活用する。
- 2) 目標や指導の手だて・評価を文章で記録し、共有する。
- 3) 題材配当や授業展開をひとりひとりの課題に対応するように改善する。

高等部では、すでに本研究が始まる前から、年々拡大していく生徒の能力差に対応するために生活学習を中心にした教育課程の再編成に取り組み、ひとりひとりの生徒への対応の方法を模索していた。このような高等部の問題意識と全体の研究主題が一致し、高等部としては幸いにもスムーズに全体の研究の流れに乗ることができた。

## 高等部としての研究

高等部というところは、多くの生徒にとって社会へ旅立つ前の最後の学習の場であり、3年間という限られた時間の中で、日常生活から職業自立に至るまで、生徒の発達段階に応じながら多岐にわたる学習を保障していかなければならない。そのため、他学部に比べて指導する教科・領域の種類が多く、しかもクラス担任が直接指導にかかわる時間も少ない。この特質は、「個に応じた指導」を進めるうえでの大きなハンディキャップとなっている。しかし、研究ということが無理を承知でがんばるのではなく、研究後をにらみながら、実現可能な範囲内でどれだけ個に迫れるか、

高等部なりに答えを求めて研究を続けている。

研究2年目で折り返し点にもあたる今年度は、昨年度の反省を踏まえて次の3つの重点課題を掲げて研究を行なった。

### 1. 保護者（学園）との連携

実態把握や課題の設定、評価の場面で、保護者（学園）との情報交換を積極的に行なう。

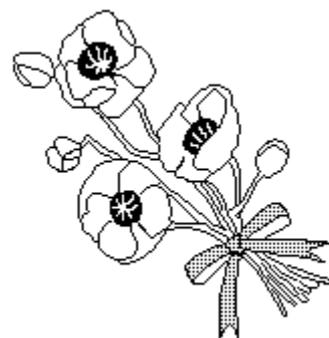
### 2. 指導技術の向上

昨年度の高等部研究で作成した6冊のマニュアルに基づいて、実態把握 本年度の課題の設定 個別目標の設定 題材の組み立て 授業 評価を行い、生徒ひとりひとりの課題に迫る。

### 3. 指導の流れの改善

今年度の取り組みを振り返って実態把握から評価に至る指導の流れを改善し、次年度の取り組みに活かすためにマニュアルの改訂を行なう。また、来年度全教科での対応になることに備えて、全体として記録の量の調整をはかる。

本論では、これらの重点課題がどのような経過を経ていかなる結果となったか。そこから次年度へ向けてどのような改善を試みようとしているかということを経済する。



## 2. 研究経過

### 第1ステージ（1学期）

今年度の高等部の研究活動は、ほぼ学期ごとに3つのステージに分けることができる（表1）。

資料作成の期間。保護者と情報交換をしながら「本年度の課題」と「個別目標の設定」を行なった。

【表1】高等部の研究経過（1997年）

	保護者（学園）との連携	指導技術の向上	指導の流れの改善
1 学期	<ul style="list-style-type: none"> <li>・実態把握マニュアルに基づいて、保護者宛に実態調査（生徒の実態と親の希望）を行った。（5月）</li> <li>・作成した「本年度の課題」を保護者に公開して、意見交換を行った。（6月）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・実態調査の結果と昨年度までの指導記録に基づいて、「本年度の課題」と「生徒の実態」をまとめた。（6月）</li> <li>・「本年度の課題」にしたがって、各教科・領域の個別目標（年間）を作った。（6月）</li> <li>・生活学習をはじめ、各教科・領域ごとに個別目標に添った指導を行ない、学期の評価を行った。（6～7月）</li> </ul>	
2 学期		<ul style="list-style-type: none"> <li>・事例検討で取り上げる生徒を選び、それぞれの生徒の本年度の課題、個別目標、授業の内容などについてケーススタディを行なった。（9月～12月）</li> <li>・生活学習の班ごとに、合計3回の研究授業を行なった。（9月～12月）</li> </ul>	
		<ul style="list-style-type: none"> <li>・担任からのリクエストと、各教科・領域の個別目標の対応をチェックした（9月）</li> <li>・生活学習をはじめ、各教科・領域ごとに個別目標に添った指導を行ない、学期の評価を行った。（8月～12月）</li> </ul>	
3 学期	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「本年度の課題」の指導結果（評価）を保護者に公開する。（予定；翌年度始業式）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・翌年度の年問題材配当の検討を行なった。（2月）</li> <li>・生活学習をはじめ、各教科・領域ごとに個別目標に添った指導を行ない、学年末の評価を行った。（1月～3月）</li> <li>・「本年度の課題」の評価を行ない、保護者向けの資料を作成する。（予定；3月）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・来年度へ向けて、記録の種類と量を調整しながら、6種類のマニュアルの改訂作業を行なった。（2月～3月）</li> <li>・2つのチェックリストを作成した。（3月）</li> </ul>

### 第2ステージ（2学期）

事例検討と授業研究の期間。生活学習の3つの班（蔵王班，松島班，仙台班）から1名ずつの事例を選び，指導や記録の蓄積を行なったほか，各班1会ずつ合計3回の研究授業を行ない，個々の課題を達成させるための授業づくりを検討した。

### 第3ステージ（3学期）

まとめと来年度への計画を練る期間。今年度の研究を振り返り，来年度へ向けてマニュアルを改訂したり，研究のまとめの報告書を作成した。

また，第2ステージから第3ステージにかけて，各教科・領域で個別目標に向けての指導を行ない，記録の蓄積や評価を行なった。



## 3. 結果

今年度の3つの重点に沿って，1年間を振り返る。

### 1) 保護者（学園）との連携

実態把握，「本年度の課題」の決定，評価の3つの場面で，保護者との情報交換を行なった。昨年度は保護者の考えについての情報が不足し，担任として設定した課題や将来像の妥当性に自信が持てなかったが，今年度は保護者の考えや家庭の事情を考慮して，それなりに妥当性のある課題を立てることができたと感じている。

一方，学園との連携については，こちらの準備不足で協力を要請するまでに至らず，不十分なままで終わってしまった。しかし，学園で作成している個々の課題を見せていただき，課題作成の一助とすることができた。

#### 実態調査

保護者に「実態調査シート」を配付して，記入していただいた。内容は，

- ・生徒の好む活動と家族の希望
- ・生活地図
- ・日常生活のスケジュール

（平日用，休日用）

- ・将来の生活の予想
- ・領域別チェックリスト

である。当初，始業式直後の早い段階で配付する予定だったが，初めての試みのため調整に手間取り，結局，家庭訪問直前に配付して家庭訪問時に詳しく説明するという形になった。

調査の事前の学部打合せで個人情報保護条例の関連項目を読み合わせ，実態調査の目的と具体的な調査内容を確認して意思統一を図った（休日用のスケジュール表は，

平日にはしていないような援助や、休日ならではの活動を書いてもらう...など)。

調査項目が多岐にわたり、量もかなり多いので、保護者のネガティブな反応をとっても心配したが、実施してみたなら多くの保護者がとても協力的だった。

### 本年度の課題の設定

図1のような様式をつくって、保護者宛に「本年度の課題」の案を公開し、意見や質問をつのった。ほとんどの保護者が原案賛成であったが、中にはもっと詳しくお話ししたいという希望を述べる家庭もあった。そのような家庭については、家庭訪問を行

なったりして話し合いの場を持った。

### 評価

図1の書類の裏に枠を設けて、ひとつひとつの本年度の課題について、簡単に指導経過と結果を書いて、翌年度の始業式で実態調査シートとともに配付することにした。保護者の方には、この評価を見て、翌年度の学習について見通しを持っていただきたいと考えている。

## 平成9年度 本年度の課題 (案)

( ) 年 ( ) 組 氏名 ( )

◎この課題は、今年度1学期かけて、授業の中で重点的に取り組んでいくものです。(この課題以外にも、たくさんの勉強に取り組んでいきます)  
 ◎保護者の方にご覧になって、本年度の課題の内容について疑問、変更の要望等ございましたら、下のコメント欄にご記入になるか、担任まで電話・面談などでご連絡ください。ご多忙の折りとはいえませんが、( )日( )日までにお願いします。ご協力、ありがとうございます。

本年度の課題		本年度の課題	
身辺 管理		性格 行動	
正課			
通学 分限		学習	

■コメント■

【図1】保護者向けの「本年度の課題」シート

## 2)指導技術の向上

実態把握 本年度の課題の設定 個別目標の設定 題材の組み立て 授業 評価を行い、生徒ひとりひとりの課題に向けて取り組んだ。昨年度より改善されたところあり、新たに問題が発生したところあり、様々である。

### 実態把握について

保護者に書いていただいた「実態調査シート」と前年度の資料（中学部から、前学年から）を主要な情報源として、実態把握を行なった。家庭訪問が終わって、調査結果を見ながら課題を考えていくと、将来像をどう設定するかで、課題の内容がかなり違ってくことを実感した。特に将来の進路が就職にするか作業所にするか微妙な生徒について、課題の選定に苦慮することがあった。また、この実態調査の結果は本年度の課題の決定に大きく影響したが、教員によって「日常生活スケジュール」については課題にダイレクトに反映したとは言えないという感想もあり、調査内容について、あるいは調査結果からの課題の選定について検討する余地があるかもしれない。

### 本年度の課題について

昨年度問題になったこの中で、「否定的な表現」や「リクエストする教科・領域の偏り」についてはほぼ改善された。しかし「抽象的な表現」の問題は、ある程度改善されてはいるものの、まだ書く人によってばらつきがある。

今年度、事例研究や研究授業を行なう中で、新たに出てきた問題点は次の2点である。

- ・本年度の課題の内容の抜け落ちや偏り
  - ・本年度の課題の年度途中での見直し
- 今年度は、「本年度の課題」を作成する

ときに「特に の内容については必ず入れてください」というような指示は出さなかった。「将来像からひるがえって、今すべきこと」を書くことにしていた。

ところが、実際に書いてみると、日常生活面や教科面など『作成者にとって見えやすい部分』の課題が中心になっていて、将来像から考えて当然あるべき課題が抜け落ちたり、特定教科に偏った課題がたってしまうことがあった。例を挙げると、就職を目指す生徒について「時間に遅れない」とか「指導者の指示を聴く」のような、就職に必要な態度面の課題が立っていない人が多く、指導する際に教科担当者の方で新たに目標を作り直したというような場合である。

建前上、そのような場合は年度途中でも「本年度の課題」を見直すことになっていたが、実際は不備があっても、忙しさに紛れて課題の再設定はほとんど行われなかった。

### 個別目標について

昨年度は「個別目標」と「題材の内容」がうまく結びつかなかったので、今年度「個別目標と題材の対応表」を作り、改善を図った（表2）。題材T1は題材の内容を考えるとときに「個別目標と題材の対応表」で各生徒の個別目標のどれにねらいを絞るのかをチェックし、そこから内容や展開を考えることにしていた。しかし、使い方がうまく認知されずに、書類を作っただけで終わってしまった感がある。

また、担任の立てた本年度の課題が、リクエスト先の教科・領域で取り上げられているかどうか調査した。その結果、リクエスト先のどこでも取り上げてもらえなかったり、一部でしか取り上げてもらっていないものが多いことが分かった。特に全指導形態にリクエストしたものについて、取り

【表2】「個別目標と題材の対応表」

表2-2 個別目標と題材の対応表 ( )

姓 名 年 組 氏 名

年 間 の 個 別 目 標		題 材											

計画段階で記入する。⇒  (年間指定目標を達成するための問題解決場面が設定できる。)  
 指導後に記入する。⇒  (問題解決場面を設定できた。)  
 指導後に記入する。⇒  (問題解決場面を設定できなかった。)

上げられる率が低かった。これについては、担任と教科・領域の担当者の調整不足ととらえている。

題材・指導の手だて

「調理」の研究授業なのに、そのグループの生徒のほとんどに「調理」の課題が立っていなかったというようなこともあり、今年度も「題材」と「本年度の課題」の不一致が時々話題になった。これについては「本年度の課題について」(p5)でも述べた通りで、より適切な「本年度の課題」を作ることによってほとんど解消されると考えている。もちろん、年度初めの題材配当の計画の時に、題材の必要性について検討を加えることも忘れてはならない。

指導の手だてそのものについての検討は、今年度の研究授業や事例検討の討議の中でもそれほど深めることができなかった。来年度へ積み残した課題である。

授業について

事例検討や日々の授業をとおして感じたことは、

- ・多くの指導場面で、個々の課題を意識して指導することができた。
- ・教科・領域間の連携がある程度図れた(同じような課題を多角的に指導できた)

ということである。生活学習はもちろん、ほかの教科・領域の指導でも、「この生徒の個別目標は?」とか「この生徒の本年度の課題は?」という観点を持ち、個人ファイルを調べたり、前回までの指導記録をチェックしたりすることが多くなった。また、生活学習で取り上げた目標を、国語・数学あるいは作業など、他の教科・領域でも取り上げてもらうように働き掛けて、教科・領域間で連携して指導ができたのもよかった。

研究授業でも、いろいろな目標を持った

生徒を集団としてまとめながら，それぞれの課題に迫る授業が形作られることを実証できた。しかし，授業の展開そのものについては，まだまだ改善の余地があると感じている。

#### 評価について

昨年度末に共通理解したことは次の4点である。

- ・授業中のメモを活用するなどして，事実  
に即した具体的な文章で表す。
- ・3種類の記号によって，次の指導の方向  
性を示す。
- ・到達しなかった課題の評価は，到達度の  
途中経過で表現する。
- ・評価の欄に次回の指導の手がかりを書く  
まだ学期末の評価が出ていないので，こ  
れらがどの程度達成されているか分から  
ないが，現時点では，2番目のことに関  
して次のような問題が明らかになった。

#### のオンパレードになった評価

の意味は『十分定着していないので継続指導が必要』というものであった。しかし，実際やってみると，

- ・達成したけれど，定着を目指して継続指導
- ・達成しなかったなので，継続指導

の二つが両方で表されてしまうため，評価の欄にずっとが続く形になってしまう場合が少なくなかった。その中には，本当は×をつけて目標を変えて指導し直す必要があったにもかかわらず，にして指導を繰り返したような場合もあった。

### 3) 指導の流れの改善

#### (1) 記録様式の検討

##### (a) 記録様式検討にあたって

昨年、指導の流れに沿って6種類のマニュアルを作成し、「指導計画」「実践記録」「まとめ」の3要素を盛り込んだ記録様式を作り、今年度実践にあたった。高等部では、教科・領域毎にグループ分けをし、グループないし、グループに所属する一人一人の課題に合った指導実践を行っているが、生徒の実態や、題材の内容、グループの人数などに大きな差があり、高等部として統一した記録様式を取る上で、改善しなければならない点が浮かび上がってきた。生徒一人一人の課題を、より分かりやすく題材毎、又は、指導場面毎に下ろせ、指導実践の記録がまとめやすく、次のス

テップへの引継ぎが明確な記録様式の作成に向けて、検討することになった。

##### (b) 記録様式検討の手順

アンケートを取る

学期末に提出する書類を係でピックアップし、全員に改善点などを自由に記述してもらおう。

アンケートの結果を、様式別に分け、検討会の原案を作成。(資1; p9)



記録様式検討会

アンケート集計の結果を元に、検討会をもつ。

各指導形態の担当者や、グループ別の担当者から対象生徒の実態に応じた意見をまとめる。

改善する様式や項目を確認する。

(資2) P9



記録様式マニュアルの改訂  
(各マニュアルの検討)

各マニュアル担当者毎に改訂版の様式を挿入。

指導記録マニュアル 担当者が、来年度の全教科実施に向けて、全様式の内容を確認し、整理する。

チェック表の作成・活用。(\*)

全学部間での、統一事項について改善する。

個人別課題対応表

		高等部1 年2 組 全名 ( ) ( ) ( ) ( ) ( ) ( )					
本 年 度 の 課 題	生 日	作 国 数	1	2	3	4	5
1 (1) 40分以内に出発や到着を遅らせる (出席) 遅いまで遅くまで丁寧に遅くことができる (出席)							
1 (3) 自分からすすんで体を動かすようになる。(出席) 1 (4) 長い時間を休まず歩けるようになる。(出席)							
1 (5) 指定された課題を一人で済ませることができるようになる。(出席)(出席)(出席) 1 (6) 交通機関の利用が一人で出来る。大きな交差点を一人で渡れるようになる。(出席)							
1 (7) 研修の仕事など、同事も責任を持って最後までやり遂げる。(出席)(出席)(出席) 1 (8) 研修しきもって決断する。(出席)(出席)(出席) 1 (9) 遅れてはいけないことに対して、任意した行動である態度を身につける。(出席・出席)							
1 (10) 自分の考えをすぐに相手に伝えることができるようになる。(出席)(出席)(出席) 1 (11) 立地や訪問を正確に使い、文章表現が簡潔に出来るようになる。(出席) (状況の説明が相手にわかるようになってほしい。例えば、忘れ物をしたとき、どこに忘れたのかを説明するなど)							

【図2】個人別課題対応表

(\*)...本年度の実践の中で、「本年度の課題が各指導形態にどのように取り上げられているのか確認をする必要があるのではないか」ということになり、『個人別課題対応表』(図2)を作成し、個々の課題を、リクエストした教科・領域で取り上げてもらえたかチェックし、学期末や年度末の評価につなげた。(「チェック表の作成」参照)【図2】

(資1) アンケート集計より

(検討会で特に取り上げられた意見のみ集約)

Q1. 現在の記録様式について改善の必要性があるか。(高等部教員24名中)

ある	19名
ない	3名
無記入	2名

Q2. 具体的な改善点(自由記述)

〔全体的な意見〕

記録様式の種類が多く、生徒の実態を見るには何枚もの記録を見なければならぬので、出来る限り1つにまとめられないか。

現在の様式すべてを全教科に下ろすのは、かなり無理がある。各教科領域の記録は必要であるが現在の記録では細かすぎる。学期末にまとめている様式だけにしてはどうか。

生徒の実態が多様化し、重度の障害をもつ生徒に対しては、題材毎に変化をまとめるよりは、トータル的に変化をまとめた方が追いやすいのではないか。

細かく形態毎に分けているために、一つ一つの記録が少なく、簡略化されている分、実態が十分に伝わらない面もある。少しずつ書かれている記録が何枚もあるよりは、詳しい記録が書かれている記録

がまとめられている方が、次年度活用しやすい。

指導対象生徒の実態に応じて、使いやすい記録が異なっている。

〔各様式毎の意見〕

(資2) にまとめて記載。

〔その他〕

日々記録(日録)の必要性。

(資2) 検討会資料より

(検討後の改定案も含めて記述。各検討会で出された意見で、追加確認された事項は太字で記述。)

係からの原案

(a) 現在の記録は、高等部の教科・領域をすべて含めたうえで、できる限り簡略化した書式であるので、現在ある書式をなくすことではなく、改善し、よりまとめやすくする方向で検討してはどうか。

(b) 「指導反省記録」「日生の記録」については、全校的な表簿として扱われているので、教務サイドとの調整になるが、高等部の記録様式にも日生の記述が含まれているので、今後調整をとっていく。

(c) 将来像 本年度の課題 各教科の目標・評価 年間のまとめという、一連の流れがわかりやすい記録を考える。(次年度活用しやすいもの、課題や目標の達成状況が見やすいもの)

(d) アンケートの結果を踏まえて、さまざまな実態の生徒に合った記録様式の作成にあたる。

アンケートの集計を受けて、記録検討の係で話し合った結果、教科・領域毎の記録は不可欠であり、煩雑になりがちな個人毎の記録を、いかに見やすく整理するかが大きなポイントとなるという結果が出され、以上の原案のもと検討会を持つことにした。

検討会にあたっては、事前にアンケートをもとに整理された資料を配布し、各自の担当している指導グループを念頭に置きながら、意見をまとめて検討会に臨んでもらえるよう、協力を依頼した。(c) の原案をもとに、[本年度の課題][学級経営案・生徒の実態と記録(1)(2)][生活学習・記録/担当者用][日生の記録]の4つの様式の検討を行った。(学期末提出書類)

(2) 記録様式の改善

【本年度の課題】

本年度の課題			
	年度	年 組	
平成	年度	年 組	氏名( )
	年度	年 組	
おおまかな将来像			
個の課題			

(様式については本年度の課題マニュアル参照)

本年度の課題の冊子の表紙に「個の課題」の欄を入れる。

・全学部統一の流れを作り、学年を追うごとの変容を明確にする。

「おおまかな将来像」の枠を半分にし、下の欄に記入する。

(詳細は本年度の課題マニュアル参照)

個の課題について、設定理由や説明も入れても良い。

ローマ数字をつけ、本年度の課題とタイプアップさせる。

めやすは5つくらい。本年度の課題と一対一で対応する必要はない。

「おおまかな将来像」も毎年書くので、「個の課題」も毎年書くことになるが、同じならコピーも可。基本的には継続だが、修正もありうる。

本年度の課題の冊子の見開き両ページに氏名欄を入れる。

本年度の課題の冊子の「実態」に、課題設定の理由につながるような記述を入れる。

「課題」に入れても良い。担任の思いがあれば、教科担当者に向けて、「～して欲しい」などの記述を入れても良い。

年度途中で、追加したものについては、( )の中に入れて記入。

本年度の課題の裏表紙に、個の課題について、生徒の変容を総合的にまとめて記述する。

\* 個の課題の達成状況や、1年の全指導を経ての生徒の実態を、総合的に記入し、次年度への引き継ぎにつなげる。

\* 来年度の担当者が、生徒の実態を把握し、課題をたてる上での参考とする。

\* その他，次年度に向けて，記入したい項目なども自由に記述する

【学級経営案・生徒の実態と記録】

(様式については「評価マニュアル」参照)

生活学習の記録をこの中に入れ，記録を統一する。(まとめる)...書式は他の教科と同じにする。

教科毎の枠を広くする。...生活学習の記

録も，同様の形式として組み入れると，見開きの様式になるので，各教科の枠を広げることが可能になる。

生活学習の題材別の細かな記録については，「学習記録/担当者用」を使用。

来年度以降は，「学習記録/担当者用」を他教科でも使用するので，(詳細は「生活学習・記録/担当者用」で記述)題材毎の目標の評価は，一つの書式にまとめ，ここでは，個別目標の達成度を記入する。(使用する教科については，「指導記録マニュアル」参照)

教科・領域ごとの記録に「評価」の欄を入れる。この際の評価は記号で記入する。

【生活学習・記録/担当者用】

(生活 - 3)

「個別目標」と「指導の手立て」の間の線を取り，「個別目標」「指導の手立て」「指導場面」についての記述を，一つの欄にまとめて記述する。

・項目の部分だけでも，「個別目標」との間に線を入れる。記入する側で一つにまとめるか，分けて記述するか決めて表記する

・「個別目標」の欄には，年間の目標をか

		1 学期	2 学期	3 学期	評価
教科名	目標				
	記録				
	引継				

みくだいたものを具体的に書く。その際、年間 の個別目標の番号をふり、対応を明らかにする。

- ・「評価」の欄を少し狭くして、「個別目標」「指導の手立て」の欄を広げる。

来年度以降は、生活学習以外の教科にも同じ書式を使用するので、「生活学習」とは限定せず、「学習記録・担当者用」とする。

題材の枠の初めは、指導形態のグループを記入する。

一人ずつ記入したものを切り離す際に

空白があると手間がかかるので、空白を開けない。

記録の取り方は、題材や指導形態によって区別する。

(a) 題材レベルまで記録をとる指導形態と、学期レベルで記録をとる指導形態と区別する。

(b) 題材レベルまで記録をとる科目でも、題材によって目標から書くものと、活動のようすのみを記録するものと区別する。

- ・生活学習（学級）などの年間グループが

固定していたり、担当が固定されている場合は、直接個人記録に記入する。（担当者用の書式は使用しない）  
 ・学習の様子だけを記入する教科について、まとめる様式を別様式にする。

（具体的な書式や評価についての詳細は「指導記録マニュアル」参照）

< 学習記録 / 担当者用 >

（記録者： ）

題材名

--	--

平成	年	月	日	~
平成	年	月	日	

個別目標・評価

氏名	個別目標	手だて	評価

自由記載欄

...目標以外の事項、または活動の様子で特に記録しておきたいことについて書く。

--

「学習題材・記録／担当者用」を使用する教科。（題材ごと）

- ・生活学習（\*），体育，作業，国語，数学

（\*）生活学習については，題材ごとに担当者用を使用して，目標からおろして記述する題材と，学習のようすのみを記述する題材に分ける。

集中学習は担当者用を使用。学級生活は，2通りを使い分ける。（題材により）

「（ ）学習題材別個人記録」（生活 - 4 (1) ~ (4)）について

- ・学習の記録のみを貼り付けていく用紙を別様式にする。

（生活 - 4 - (1)）			
<（ ）学習 題材別個人記録> （No.1）			
生徒名			
年 組		班	
本生徒の年間個別目標			
個別目標・評価			
題材	個別目標	指導の手だて	評価

(生活 - 4 - (3))

学習題材別個人記録： 年 組 ( 班 ) (No. )

個別目標・評価

題材	活動の様子

「学級経営案・生徒の実態と記録」にま  
とめて記録する教科。(学期ごと)

- ・音楽，現場実習，特別活動

【日生の記録】

前述の「係からの原案(b)」p 9を受け  
て，学部で新しい書式を作成。

- ・現在の書式では，細かく指導の記録を書き留めることができない。
- ・日生の記録をしっかりとした形にする必要がある。  
課題ごとに一枚の用紙を使用する。(4つ課題がある生徒は4枚必要。)  
生徒の実態に応じて，日録として日々記入しても良いし，変容が見られた時に随時記入しても良い。

日常生活の指導記録 <学級の経営> No.

課題	生徒氏名		記録者		
日	指導の手立て	活動の様子/変容	日	指導の手立て	活動の様子/変容

### (3) マニュアルの改定

今年度の取り組みを振り返って実態把握から評価に至る指導の流れを改善し、次年度の取り組みに活かすためにマニュアルの改訂を行なった。

- ・実態把握マニュアル
- ・「本年度の課題」作成マニュアル
- ・指導記録マニュアル
- ・評価作成マニュアル
- ・年間題材配当マニュアル
- ・資料管理マニュアル

### (4) チェックリストの作成

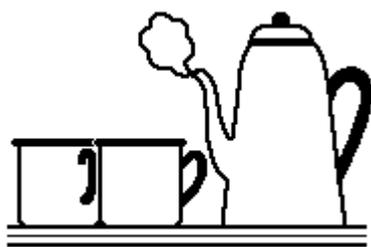
効率的な仕事ができるように、いくつかの作業についてチェックリストを作成した。

- ・題材 T 1 の題材実施前後の作業チェックリスト
- ・学期末提出書類チェックリスト

使いはじめるのは来年度からである。

### (5) 個の課題

今まで、高等部では「個の課題」に当たる部分を文章で書き表してはいなかった。しかし、全体研究からの要請で、「個の課題」についても書き表すことにした。詳しくは次章（4.来年度へ向けての改善）を参照。



## 4. 来年度へ向けての改善

### - マニュアルの変更点のまとめ -

前章で述べたような結果を受けて、次年度へ向けての改善策を検討し、それをマニュアルの改訂版に盛り込んだ。その改善策の中には、今年度まで生活学習だけで行ってきた記録や評価の積み重ねを、来年度から全教科・領域に広げていくことへの対応策も含まれている（unbelievable!）。

以下、各マニュアルごとに新しくなった点を整理した。

#### 1) 実態把握マニュアル

保護者宛の「実態調査シート」を含めて、ほぼ今年度どおり。大きく変わったのは次の2点。

##### 保護者・本人の希望について

今年度の反省の中に「実態調査シートに保護者の願いを書く欄がほしい」というものがあつた。具体的な希望ではなく、例えば「明るく、人に好かれる子に育ててほしい」というような願いである。これは、将来像や本年度の課題（の優先順位）に影響を与えると考えられるので、来年度から書いていただくように様式を改めることにした。

また、将来像について、保護者の希望を書く欄があるが本人の希望も同じように重要視すべきだと考え、それについては進路指導記録簿に担任が聞き取って記入することにした。

##### 学園との連携について

職員用には、保護者用のシートから必要な事項を抜粋して必要最低限の情報提供をお願いすることにした。現時点で学園との

調整も済み，一般家庭と同じ始業式に用紙を配付し，その後の学園訪問の時に担任が聞き書きするというやりかたで行なうことにした。

また，学園の保護者とのやり取りについては，新1年生は入学式の時に通学生と同じシートを配付して書いてもらい，2・3年生は郵送などはしないで懇談に来た親には説明とともに渡して，次回懇談のときに提出してもらうことにした。

## 2)「本年度の課題」作成マニュアル

このマニュアルは，実態把握を受けて「将来像」の作成 「個の課題」の作成 「本年度の課題」の作成までの3つの内容を含んでいる。今回は，それらすべてについて改善することになった。

### 将来像の書き方

他学部より，将来像を「～している」という断定的な書き方にすると，発達の可能性を狭めているように感じるという指摘を受け，次の2点について確認した。

- ・「像」としての書き方ではなく，「～してほしい」「～になってほしい」という願いとしての書き方にする。
- ・断定的な表現は用いない。  
(カラオケを楽しむようになってほしい。  
カラオケなどの余暇を楽しむようになってほしい)

### 個の課題について

「個の課題」を「将来像に向けての在学期間での課題」と定義し，1年次に高等部卒業時を想定して書くことにした(多くても5つぐらい?)。基本的には2年次・3年次とそれを受け継ぐが，必要があれば修正する。また，個の課題にはローマ数字を付けて，本年度の課題との対応を明確にする。

書く場所は，本年度の課題シートの将来像の欄を半分にして，そこに記録する(「3)(1)指導の流れの変更」p10を参照)。

### 本年度の課題のチェックと検討

前章で述べたとおり，今年度は「本年度の課題」に過不足があった。その問題への対応策として，

- ・精神薄弱養護学校指導要領解説の「各教科の具体的内容」と本校で作った指導内容表を参考にチェックする(担任)
  - ・その後，教科・領域ごとの担当で検討会を開き，必要があれば本年度の課題の修正を要求する
- ということを付け加えた。さらに，
- ・今年は，指導形態に遠慮した抽象的な課題があった。もっと具体的に注文を付けよう!そして，それを受け取った側で，どうしても困る場合は調整しよう。
- ということを確認した。

### ケーススタディの実施

将来像・個の課題・本年度の課題・個別目標の立てかたについては，毎年学部の教員全員で共通理解をはかる機会を設けないと記述の統一はなされないということで，そのためのケーススタディを毎年行なうことにした。

## 3)指導記録マニュアル

昨年度は「生活学習の記録マニュアル」だったが，来年度からすべての教科・領域に広げて記録・評価を行なうことになったので，その名を「指導記録マニュアル」にあらため，内容もそれに合わせてリニューアルした。

各教科・領域の記録の取り方

生活学習では、題材ごとに記録（個別目標・指導の手だて・評価）を取ることにしていた。しかし、それをそのまますべての教科・領域に広げてしまうと大変なことになるので（sigh...），題材ごとに記録するものと学期ごとの記録だけで済ませるものとに分けることにした。

題材ごとに記録するもの

生活学習Ⅰ（ 1 ） / 生活学習Ⅱ / 数学・国語 / 作業学習 / 体育

学期ごとの記録で済ませるもの

現場実習 / 音楽 / 特別活動

課題ごとに記録するもの

日常生活の指導（ 2 ）

なお，生活学習Ⅰの中で，行事の前後数時間だけの短い題材については，活動の様子の記述にとどめて目標や指導の手だての設定はしないことにした（ 1 ）。また，日常生活の指導については，課題ごとに記録用紙を準備して記録を蓄積し（図3），評価は学期末にすることにした。

日常生活の指導記録 <指導の手だて> NO. \_\_\_\_\_

課題	生徒氏名		記録者	
	目 指導の手だて	活動の様子/変化	目 指導の手だて	活動の様子/変化

【図3】日常生活の指導の記録用紙

個別目標と題材の対応表について  
 題材ごとに記録を取る教科・領域については、「個別目標と題材の対応表」を使用することにした。

#### 4) 評価作成マニュアル

評価マニュアルの担当範囲は、題材や学期ごとの評価、「本年度の課題」の評価および保護者（学園）への報告、「個の課題」についての所見である。

題材や学期ごとの評価について

- 4段階評価へ -

前章で述べたように、今年度は評価の欄が のオンパレードになる場合があって、改善が必要とされた。 が続く原因は、 の守備範囲が広すぎることで考え、 の段階を2つに分割して全部で4段階の評価にすることにした。

= 指導完了

= 達成しているが、定着を目指して継続指導

= 達成できなかったため、指導の手だてを変えて継続指導

× = 達成できないので、目標を修正して再挑戦

この中で、 と が今年度 にしていた部分である。このように段階をひとつ増やして意味を明確にすることによって、 のオンパレードはなくなるだろう。

もし、指導の手だてを変えながら指導しても がつく場合は、評価を×にして目標を再設定し、 がつくように努力するというようにした。その際は、課題をスモールステップに変えたり、課題の達成場面を限定するという方向で考えてみる。

#### 課題をスモールステップで刻む

「カレーライスを一人で作る」

「カレーライスを（6 3 1 0）回以内の援助を受けて一人で作る」

「 まで一人で歩く」

「 までの道のりの（5 3 1）分の1の距離を一人で歩く」

#### 課題達成の場面を限定する

「みんなの前でみんなに聞こえる程度の声量で発表する」

「始まりのあいさつをみんなに聞こえる程度の声量でする」

「ひらがなの50音を書ける」

「名前をひらがなで書ける」

「住所をひらがなで書ける」

また、学級経営案に記入する学期末の評価（各教科・領域）については、今年度はまだ「通信簿的」な文章で書かれたものがあった。それについては、

- ・個別目標に対して1対1で評価を書く。
- ・その学期に指導しなかったものは「指導場面なし」と書いておく。

ということを確認した。

#### 保護者（学園）への報告

年度当初に「本年度の課題」について保護者から意見をうかがっているため、当然その指導の結果は報告していかなければならない。保護者向けの本年度の課題シートの裏に欄を設け、設定したすべての本年度の課題について、ひとつひとつ指導の経過（手だて）と結果を簡潔に書いて報告する

ことにした。配付時期は翌年度の始業式で、実態調査シートとともに渡すことにしている。

学園の生徒については、学園とのやり取りを中心にして、親と会えたときには親へその資料を配付する。

「個の課題」についての所見

本年度の課題シートの4ページ目に欄を設け、一つ一つの個の課題について、簡単に所見を記入することにした。

各教科・領域の評価のタイミング

これについては、この章の「3)指導記録マニュアル」の項(p17)を参照されたい。

## 5)年間題材配当マニュアル

特に大きな変更はない。次の2点だけ。

個別目標と題材の対応表

題材ごとに評価する教科・領域(生活/体育/作業/国数)については、「個別目標と題材の対応表」を使用する。対応表は、年度当初にそれぞれの個別目標を「指導可能」な題材にをつけ、題材T1はそれを見て題材の内容や展開を決めていく。題材終了後、実際に指導できたものについては に変えることにする。

生活学習I

- 記録を残す題材とそうでない題材 -

生活学習については、すべての題材を記録するのは大変なので、行事の前後などの短い期間の題材については、活動の様子を記録するのみにとどめることにした。毎年、その年の生活学習担当者が提案して決めることにした。

## 6)資料管理マニュアル

まだ話し合いをしていないので、改善点も現時点では特になし。しかし、2点だけ指摘しておきたい。

- ・ファイルを新しく買ってほしいゾ!  
(個人ファイル用と教科・領域用)
- ・ファイルを置く場所をどうにかして!

## 5.まとめと今後の展望

長々と書いてきました。文字数約9100!また、皆さんのブーイングが聞こえてきそうです。私も書いていて、いいかげん疲れましたので、この章はちょっと手抜きです。

今年度のまとめ

まとめに代えて、「研究前と現状の比較表」なるものを作ってみました(表3)。この表を見ると、なんかすごく研究が進んだように感じませんか?詳しい説明は省略します。(ぼろが出ると困るので...)

来年度へ向けての課題

これも短く簡単に書いて終わりにします。来年度のお仕事は、

- ・個々の課題への追及を極める!
- ・資料の管理方法をしっかり決める。
- ・公開研究会を無難にこなす。
- ・研究の成果を風化させないために各方面(主に教務)と調整する。

の4本です。以上。

【表3】研究前後の比較

項目	研究前	現状	コメント
前年度の資料を活かした実態把握			
家庭の願いを取り入れる	×		今までの家庭訪問や懇談に加えて実態調査
将来像を描く	×		
おおまかな目標を設定する			個の課題，より具体的になった
具体的な目標を設定する	×		本年度の課題（内容の充実が必要）
教科領域ごとに個々の目標を設定する	×		
担任と教科領域の担当者が打合せをする	×		来年度は会議を設定
題材の目標を個別に設定している	×		
個別の評価を具体的に文章化する	×		
授業の評価を記録として残す			
家庭と指導内容について具体的に協議する	×		評価については来年度

× = システムとしてはなかった（各担当者におまかせ）  
 = システムにあったが改善の余地あり  
 = システムとしてあり，現状としては満足

# 資料編

Contents...

事例研究のまとめ  
研究授業のまとめ

●  
省  
略